『金剛頂瑜伽十八会指帰』「一切義成就品」の品題をめぐる一考察[1]

秋　山　　学

序.『法華陀羅尼略解』からの出発：「一切義成就菩薩」をめぐって

筑波大学附属図書館に所蔵される慈雲（1718-1804）最晩年の直筆本『法華陀羅尼略解』が対象とする「法華六陀羅尼」は，そのままのかたちで『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』すなわち『観智儀軌』に取り込まれている．この『観智儀軌』は，その基盤を「大悲胎蔵曼荼羅」に置くと考えられるが，その曼荼羅敷設部の記載には次のようなくだりがある（那須 1932：122-123）.

「其の壇は三重なり．當中の内院は八葉の蓮華を畫き，華胎の上に於て窣覩波塔を置け．其の塔中に於て，釋迦牟尼如來と多寶如來と同座にして坐せるを畫け．塔の門は西に開けたり．蓮華の八葉の上に於て，東北の隅從り首と為し，右に旋って布列して八大菩薩を安置せよ．初には彌勒菩薩，次には文殊師利菩薩，藥王菩薩，妙音菩薩，常精進菩薩，無盡意菩薩，觀世音菩薩，普賢菩薩なり．此の院の四隅の角内に於て，初めの東北の隅に摩訶迦葉を置き，次の東南には須菩提，西南には舍利弗，西北には大目揵連なり．次に第二重の院に於て，其の東門に於て金剛鎖菩薩を置き，南門に金剛鈴菩薩を置き，塔の前の門に當って金剛鉤菩薩，北門に金剛索菩薩なり．東門の北に於て得大勢菩薩を置き，門の南に寶手菩薩を置け．次に南門の東に於て寶幢菩薩を置き，門の西に星宿王菩薩を置け．次に西門の南に於て寶月菩薩を置き，門の北に滿月菩薩を置け．次に北門の西に於て勇施菩薩を置き，門の東に一切義成就菩薩を置け．又東北の隅角の内に於て，供養華菩薩，東南の隅に供養燈菩薩を置き，西南の隅に供養塗香菩薩，西北の隅に供養燒香菩薩を置け」.

こうして『観智儀軌』には「一切義成就菩薩」が登場する．この『観智儀軌』は，事実上，密教経典を集中的に漢訳した不空（Amoghavajra，705 年-774 年）が撰したものであるとされる．『観智儀軌』を含め，いま「一切義成就」

という表現が現れる密教経典の主なものを挙げるならば，以下のようになる(典拠記載は「大正大蔵経」頁欄行数による).

1．『金剛頂一切如来真実摂大乗現證大教王経』(全 3 巻) 大正№ 865，不空訳．3 箇所 (207 下 10；207 下 13；208 上 14).
2．『理趣経』大正№ 243，不空訳．1 箇所 (784 中 21).
3．『理趣釈』大正№ 1003，不空訳．2 箇所 (609 中 11〔理趣経の引用〕；609 中 28).
4．『観智儀軌』大正№ 1000，不空訳 (撰)．1 箇所 (595 下 8〔上記引用〕).
5．『金剛頂瑜伽十八会指帰』大正№ 869，不空訳．2 箇所 (284 下 18；286 上 3).
6．『金剛頂経瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』(『五秘密軌』) 大正№ 1125，不空訳．1 箇所 (538 下 25).

上に注記したように，これらはいずれも不空の訳ないし撰になるものである．これらのほかに施護 (Dānapāla，1015 年頃) の訳によるものとして

7．『仏説一切如来真実摂大乗現證三昧大教王経』(全 30 巻) 大正№ 882

があり，この 7．のうちに「一切義成就」という用例が 13 箇所において出現する (後述).

1．『五秘密軌』に見える「一切義成就」をめぐって

さて慈雲は，示寂の 2 年前，すなわち 1802 年の成稿になる『金剛薩埵修行儀軌私記』の第 3 部『五秘密軌』(上記参照) への注記において，『五秘密軌』の末尾部に近い一節 (塚本 1920：160)，

「普賢曼荼羅は五身を離れず．降三世曼荼羅は即ち金剛界に同じ．蓮華部は遍調伏曼荼羅なり．これに依りてこれに例するに，宝部は一切義成就．またこの説に同じ」

をめぐって

＜金剛頂初会四大品に約して釈す＞

との注記を施し（『慈雲尊者全集』巻 8-51 頁），この『五秘密軌』の一節が『初会金剛頂経』の「四大品」を指示していることを明らかにする．ここで，四大品より成るとされている『初会金剛頂経』の各品の名は，1 金剛界品，2 降三世品，3 遍調伏品，4 一切義成就品である．すなわち，この「初会」のうち第四品の名が「一切義成就」である．もっとも『五秘密軌』は確かに不空訳ではあるものの，不空は『初会金剛頂経』のうちの第一品である「金剛界品」，しかもそのうちの第一「金剛界大曼荼羅」のみを漢訳し，「金剛界品」の第二「陀羅尼曼荼羅」以下に相当する部分，および第二品以降については訳出を果たさなかった．したがって，同じく不空訳とされる『五秘密軌』において「一切義成就」という表現が見られることに鑑み，先に『初会金剛頂経』の四大品の名を挙げる際に参照したのは，やはり不空の訳になるとされる『金剛頂経十八会指帰』（5.）であった．この『金剛頂経十八会指帰』の冒頭には，次のような一節がある（那須 1975：19）．

「金剛頂経瑜伽は十萬偈十八会あり．初会を一切如来眞實摂教王と名づく．四大品あり．一には金剛界と名づけ，二つには降三世と名づけ，三つには遍調伏と名づけ，四つには一切義成就と名づく」．

上の一節に現れる「一切義成就」が，先に 5. に付記した最初の用例，すなわち 284 下 18 の場合ということになる．ところで『五秘密軌』中の一節として先に引いた「宝部は一切義成就」というくだりは，『初会金剛頂経』の第四品が「一切義成就品」であることを受けてなされたものであるが，ここに一つ問題が生じる．『初会金剛頂経』中の第四品「一切義成就品」の品題「一切義成就」が何を指すものであるのかについては，再考の余地があるように思われるからである（これは後述するように，不空と施護で訳語の選択が異なること等にも起因する）．それゆえ，ひいては慈雲がこの『五秘密軌』の一節に注疏を施しつつ，「一切義成就」という表現に何を連想したかという問題に関して，異なった理解が生じ得るのである．

本稿は，この問題をめぐって，「一切義成就とは普賢菩薩の異名なり」とする不空訳『理趣釈』の注記を踏襲する慈雲の『理趣経講義』一（全集 285），『教

王経釈』（全集 55）その他での理解が，この『五秘密軌』の一節に対しても有効であり，かつこの慈雲の解釈が，われわれの『初会金剛頂経』理解にも光をもたらすものであることを実証しようとする試みである．

2．『初会金剛頂経』へ：不空訳と施護訳

ところで，先に挙げた 1．から 7．までのうち，不空訳による 1．から 4．での用例は，「一切義成就菩薩」という表現そのもので現れるか否かを問わず，一切義成就菩薩のことを意味している．それに対して 7．の施護訳では，不空訳の 1．における「一切義成就菩薩」sarvârtha-siddhir bodhisattva は「一切義成菩薩」と訳されている．すなわち施護訳では，341 下 20（「中猶如胡麻皆悉雲集詣一切義成菩薩坐菩提場所即爲示現受」），341 下 25（「爾時一切義成菩薩摩訶薩由諸如來爲警覺已即從阿娑頗那迦」），342 上 28（「時諸如来乃為具徳一切義成大菩薩」）にいずれも，「一切義成（大）菩薩（魔訶薩）」という表現が現れるが，原文ではそれらは順に，Sarvârtha-siddhir bodhisatvo mahāsatvo; Sarvârtha-siddhir bodhisatvo mahā-sattvaḥ; Sarvârtha-siddhir mahā-bodhisattvo である．ここに引用した 3 箇所について，siddhi は人名ゆえ，語尾 -i を持つ男性名詞であり，これが連声して siddhir と記されたものと思われる．これら 3 箇所に関して，不空はそのいずれの場合についても（207 下 10，207 下 13，208 上 14），それらを「一切義成就菩薩魔訶薩」と訳している．

かくして，施護訳に「一切義成就菩薩」は登場しない．一方，施護訳で「一切義成就」と訳される原語（上に触れた 13 箇所）は，7．のサンスクリット原文を参照すれば判明するように（堀内 1974），sarvârtha-siddhi（ないしその同系語）であり，これは「成就」といった女性抽象名詞を思わせる語彙であって，上掲の人名としての sarvârtha-siddhi とは同形だが別の語彙である．不空訳の「3 巻本教王経」（1.）その他において「一切義成就菩薩」とされるのは，慣例によれば釈迦如来の成道以前の姿であり，これは抽象名詞ではない．

これに対し，施護が初めて「一切義成就」という訳語を用いるのは 345 上 29 であるが（「我作一切義成就」），この箇所の原文は sarvârtha-siddhinām である．これを不空は「一切益成就」（210 中 26）と訳している（後述）．つまり施護が「義成就」と訳す表現は，不空にとっては「益成就」と訳すべき箇所である一方，不空が「一切義成就」と訳した 3 箇所，つまり菩薩の形容辞に関しては，施護はこれを「一切義成」と訳し分けているのである．なお施護は，他

に「一切義利成就」という訳語も用いる（433 中 29）．これは偈の部分を訳すに際し，七言など詩形に配慮したためであろう．原語は同じく sarvârtha-siddhi（-rūpaṃ）である．

先に，不空訳による『金剛頂経十八会指帰』（5.）に「一切義成就」という訳語が 2 例見えるということを明らかにした（284 下 18；286 上 3）．これを正確に言うと，不空が（『十八会指帰』中にではあるが）「3 巻本教王経」以外の『初会金剛頂経』に含まれるべき部分の中に「一切義成就」と訳出した箇所は 2 例見出されるが，それらはいずれも『初会金剛頂経』第四品の品題に触れた箇所である，ということになる（なお不空訳『五秘密軌』に現れる「一切義成就」もこの箇所を指している．後述）．不空はこの品題相当部において「次説一切義成就大品中」（286 上 3）と記す．『十八会指帰』には原文が残存しないため，その原文が何であったのか，われわれは知る由もない（不空撰とすべき著作なのかもしれない）．ともかく，『初会金剛頂経』の原文を参照すれば，この経には品題はなく，施護訳によれば分題が「一切義成就大曼拏羅廣大儀軌分」第十九（411 下 22）と記されているのみである．この分題のサンスクリット原文を見ると，確かに sarvârtha-siddhiṃ nāma mahā-maṇḍalam となっていて（堀内 1974：123），上述した経緯から推せば，施護なら「一切義成就」と訳しておかしくない箇所である．また施護訳にはこの分名のほか，「説此一切義成就大曼拏羅頌曰」（412 下 19）といった用例が見られる．もとよりこの箇所に関しては『十八会指帰』には対応する訳文が見当たらず，そもそも不空訳に「一切義成就曼陀羅」という表現は現れない．

かくして不空は，総じて上掲の諸節に対応する部分を『十八会指帰』の中には訳出しておらず，意を採って（撰して？）第四品を「一切義成就品」とし，また同品第一の「大曼荼羅」には単に「第一大曼荼羅」（286 上 3-4）と出すのみである．これは上掲のように施護が「一切義成就大曼荼羅」（412 下 19）としているのとは対照的である．

こうして見てくると，不空が『十八会指帰』において，『初会金剛頂経』の第四品を敢えて「一切義成就品」としたことの背景には一定の意図が読み取れそうである．本稿では不空によるその意図とは，「第四品」が『初会金剛頂経』の巻末にまで及ぶとの彼の解釈を示すものであると理解したい．そして，この不空の「一切義成就」という訳語の背後に，『十八会指帰』末尾部に表明される，不空の「普賢菩薩＝釈尊」観を読み取りたいと考えるものであるが，これは慈雲による「一切義成就」理解とも通底するものである．両者の解釈を顧みるこ

とで，『初会金剛頂経』が，釈尊の成道から初転法輪までの経緯を密教的に記述したものであるということが明らかとなり，おそらくは密教の思想的内包が示されることになろうと予想するためである．

3．『金剛頂経』について

ここで改めて『初会金剛頂経』について，一定の説明を施しておくことにしよう．『金剛頂経』とは，「両部曼荼羅」として知られる「胎蔵曼荼羅」および「金剛界曼荼羅」のうち，「金剛界曼荼羅」が，その教理内容を踏まえて図画化したところの基礎経典である（小峰 2016：26）．ただその場合，そもそも『金剛頂経』と呼ばれる際には，3 段階での把握が含まれることに注意する必要がある．まず，

①『金剛頂瑜伽十八会指帰』（不空訳，大正№ 869）

の中に「金剛頂経瑜伽に十万偈十八会あり」として，十八会それぞれの名称が挙げられる場合のようなマクロ・レベルでの把握がある（既述）．次に

②『仏説一切如来真実摂大乗現證三昧大教王経』（30 巻，施護訳，大正№ 882）

は，①で述べられた「十八会」のうちの「初会」すなわち第一会のみについて，その全訳を施したものであり（1015 年頃成立），いわば中レベルでの把握である．この初会は，色界の最高天である色究竟天を舞台とする．この施護訳は，本稿では「30 巻教王経」と呼ばれる．

この施護訳の注釈としては，杲宝（1306-1362）による『三十巻教王経文次第』（大正№ 2226）が初出であり，かなり後世に下ると言えるが，これは不空の「3 巻本教王経」が空海請来ということもあって，その権威が絶対視されていたためとされる．

③『金剛頂一切如来真実摂大乗現證大教王経』（3 巻，不空訳，大正№ 865）

通常「金剛頂経」と称される際には，この③の不空訳が含意されている．この不空訳大教王経を，本稿では「3 巻本教王経」と呼んでいる．この訳は，先述したように②で示した施護による『初会金剛頂経』全訳のうち，冒頭に位置する金剛界品の中のさらに金剛界大曼荼羅に相当する部分の漢訳に相当し，金剛界曼荼羅上では，中央の成身会に当たる部分を説いたものである．施護訳の巻数で言えば，30 巻教王経のうちの第 6 巻の中ほどまでに相当する．

ところで，「十八会」といった場合，その内容と「会」は以下のとおりである．

1.	一切如来真實摂教王	色究竟天
2.	一切如来秘密主瑜伽	色究竟天
3.	一切如来教集瑜伽	法界宮殿
4.	降三世金剛瑜伽	須弥盧山頂
5.	世間出世間金剛瑜伽	波羅奈国
6.	大安楽不空三昧耶真實瑜伽	他化自在天宮
7.	普賢瑜伽	普賢菩薩宮殿
8.	勝初瑜伽	普賢宮殿
9.	一切仏集会拏吉尼網瑜伽	真實宮殿
10.	大三昧耶瑜伽	法界宮殿
11.	大乗現証瑜伽	色究竟天
12.	三昧耶最勝瑜伽	虚空界菩提場
13.	大三昧耶真實瑜伽	金剛界曼荼羅道場
14.	如来三昧耶真實瑜伽	―
15.	秘密集会瑜伽	秘密処
16.	無二平等瑜伽	法界宮
17.	如虚空瑜伽	實際宮殿
18.	金剛宝冠瑜伽	第 4 静慮天

これらのうち，漢訳や漢文による儀軌が編まれた会としては，不空訳の『理趣会軌』（大正№ 1122）や『理趣経』（大正№ 243）が出される第六会，『大楽軌』（大正№ 1119），『勝初瑜伽軌』（大正№ 1120），『普賢軌』（大正№ 1123）が出される第八会，『五秘密軌』（大正№ 1125）が出される第十三会，施護訳『仏説一切如来金剛三業最上秘密大教王経』（全 7 巻，大正№ 885）が出される第十五会などが重要である．

4．施護訳『30巻大教王経』における「一切義成就」

ところで『30 巻大教王経』全編の中で，「一切義成就」という表現は，先述のように総計 13 箇所に登場する．以下にその全容を紹介する．これは施護が選択した訳語であるわけだが，特に第二「陀羅尼曼荼羅」以下に，施護によって「一切義成就」と訳された箇所が多数見出される．それらは釈尊とは関わりがなく，むしろ虚空蔵尊と結びつき，現世的な利益を意味する箇所に該当す

る．ただ先述のように，宝幢菩薩をめぐり原文がsarvârtha-siddhināmとなっている一箇所について（第一「金剛界大曼荼羅」345上29；堀内1983：52），不空が「一切益成就」と訳しているのに対し，施護は「一切義成就」と訳している．この語尾は，sarvârtha-siddhiの複数属格形だと思われるが，ともかく原語はsarvârtha-siddhiである．この箇所は，「おお，比類なき宝幢は，一切の益を成就す．一切の意を満たす者であり，一切の願を満たさしむものである」と訳され，前二句は自証の徳を嘆じ，後の二句は化他の徳を嘆じるものとされる（遠藤1985：156）．ここも釈尊と直接つながる箇所ではないため，不空は菩薩の名としての「一切義成就」との差異化の意味で，敢えてここを「一切益成就」としたのであろう．

他の12例は次のとおりである．

411下22　一切義成就大曼拏羅広大儀軌 sarvârtha-siddhi-mahā-maṇḍala-vidhi-vistara
412下19　一切義成就大曼拏羅頌 sarvârtha-siddhiṃ nāma mahā-maṇḍalam
412下21　此名一切義成就　(Ch.) sarvârtha-siddhir iti smṛtam
415下21　結一切義成就印　［sarvârtha-siddhi-］mudrā
422下23　一切義成就大明　sarvârtha-siddhiṃ nāma hṛdayam
（※422下25 陀羅尼中に　sarvârtha-siddhiṃ；陀羅尼中のため数に加えず．後述）
423上02　依一切義成就壇　sarva-siddhes
425下11　彼一切義成就印　sarvârtha-siddhi-san-mudrā
434上06　一切義成就勝相　sarvârtha-siddhi-rūpaṃ
435下10　一切義成就相門　[sarvârtha-siddhi-rupēna]
435下11　此佛所説一切義成就　Sarvârtha-siddhi
438下13　一切義成就大士聖相　bhagavantaṃ sarvârtha-siddhi
439上05　施彼行人一切義成就　sarvârtha-sādhako※

※＜√sādh「成就する」より派生する形容詞sādhakaであり，√sādh の弱形√sidhに発する名詞siddhiとは同根語である．

上の一覧から，施護がsarvârtha-siddhiを一貫して「一切義成就」と訳していることが判明する．これは423上02の場合のように，ārthaの語がない場合にも一貫している．

ところで，『初会金剛頂経』の第四品「一切義成就品」に相当する部分の梵名はsarva-tathāgata-karma-samayo-nāma mahā-kalpa-rājaḥ（「一切如来・羯磨三昧耶と名づくる大儀軌王）であり（堀内 1974：114），ここに「一切義成就」に対応する語彙は見られない．したがって，不空が『十八会指帰』においてこれを「一切義成就品」と漢訳したことの背景には，一定の意図が認められると判断してよいだろう．一方施護は，その第四品の冒頭第 19 分の梵名が上掲のようにsarvârtha-siddhi-mahā-maṇḍala-vidhi-vistaraであることを受け，これを「一切義成就大曼荼羅広大儀軌分」と訳したわけで，施護が「第四品」として「一切義成就品」を立てたわけではない．「第四品」として「一切義成就品」を設定したのはあくまでも『十八会指帰』における不空である．施護が見ていた原典梵文を不空も見ていたのであるならば，不空が『十八会指帰』を「撰した」可能性が一層高まるゆえんでもある．

さて，第 19 分以降で述べられている内容は，ここに登場する主尊・虚空蔵尊が「あらゆる目的（とくに生産と財宝）を成しとげる」ほとけ（頼富 2005：264）と位置づけられ，この尊が「現世での幸福・幸運」（同：266）を象徴する尊格として活動する，というものである．この内容理解自体は間違っていない．しかしながら，もしこの虚空蔵尊自体が，ここでの「一切義成就菩薩」である，と解釈されるのであれば，「義」が現世的な「富」あるいは「利」「益」といった意味で用いられていることになり，どこか違和感を覚えるのは筆者ばかりではないであろう．

この理由はどこにあるのだろうか．その理由の一つは，「財産，利益，金銭，目的，意見」（平岡 2005：598）を意味し「実利」（上村 1984）を表す語彙arthaを，施護が「義」と訳したことにある．もう一つの理由は，『初会金剛頂経』第四品を「一切義成就品」と規定したのが不空であるのに対し，この品名を施護訳の全訳『初会金剛頂経』に混入させ，あたかも第 19 分以降の主尊・虚空蔵尊が，不空の意味する「第四品」の主尊であるかのように錯覚して（させて）きた解釈史の側にあると言えるだろう．

われわれは，『初会金剛頂経』の品立て・部立てをもう一度検討する必要がある．

5．『初会金剛頂経』の構造と金剛界曼荼羅の意味

そこでわれわれは，いま一度，施護訳『30 巻教王経』に基づき，その「四

大品」および第四品以降の次第を明らかにせねばならない．『初会金剛頂経』は，施護訳全 30 巻・全 26 分に基づくと，次のように内容を区分できる．

1-8 巻：金剛界品：金剛薩埵を主尊とした如来部〔仏部〕．〔含：金剛界大曼荼羅，三昧耶曼荼羅，微細曼荼羅，供養曼荼羅，四印曼荼羅，一印曼荼羅〕

9-17 巻：降三世品：大転輪王菩薩を主尊とした金剛部．〔含：降三世大曼荼羅，忿怒秘密印曼荼羅，法智三昧耶曼荼羅，羯磨曼荼羅，四印曼荼羅，一印曼荼羅；外金剛部大曼荼羅，三昧耶曼荼羅，法曼荼羅，羯磨曼荼羅〕

18-21 巻：遍調伏品：観自在菩薩を主尊とした蓮華部．〔含：遍調伏大曼荼羅，蓮華秘密印曼荼羅，智曼荼羅，蓮華羯磨曼荼羅，四印曼荼羅，一印曼荼羅〕

21-24 巻：一切義成就品：虚空蔵菩薩を主尊とした宝部〔摩尼部〕（意味上，羯磨部を含むとされる）．〔含：宝部大曼荼羅，宝秘密印曼荼羅，宝智曼荼羅，宝羯磨曼荼羅，四印曼荼羅，一印曼荼羅〕

このあと，第 24 巻から第 30 巻までは「「外篇・教理分」という附属部分があるが，思想的にも，実践的にもさほど重要な意味を持たない」（頼富 2005：264）とされるため，その内容については，ひとまず次章に譲ることにしたい．

そこで上掲の四大品に関して見るならば，この背景には，「如来（仏），金剛，蓮華，宝」，および，表立ってはいないがこれに「羯磨」を加えた五部構成が認められ，「如来（仏），金剛，蓮華，宝」部の各々が四つの大品に該当している．「羯磨部」は「宝部」のうちに含まれているとされる．密教の秘義にあたる「三密」のうち，身密を表すのが如来部，意密を表すのが金剛部，口密を表すのが蓮華部であり，これに財宝性・自利を表す宝部，作業性・利他を表す羯磨部が加わって金剛頂経系の五部が構成される．

ここで曼荼羅との関連について触れておきたい．金剛界曼荼羅は九会より成り，その九会とは「成身会・三昧耶会・微細会・供養会・四印会・一印会・理趣会・降三世会・降三世三昧耶会」を指す．このうち「成身会」から「一印会」までが，『初会金剛頂経』金剛界品の内容，すなわち上掲の「金剛界大曼荼羅」「三昧耶曼荼羅」「微細曼荼羅」「供養曼荼羅」「四印曼荼羅」「一印曼荼羅」記述部にそれぞれ対応する．続く「理趣会」曼荼羅は，本稿第 3 章に示した『金剛頂経』系 18 会のうち第 6 会から出されるものであり，系統を異にする．一方「降三世会」および「降三世三昧耶会」は，上掲した『初会金剛頂経』降三

世品の「降三世大曼荼羅」「忿怒秘密印曼荼羅」記述部に各々対応する（越智 2005：184）．また曼荼羅は，形像の上からは 4 種に分類しうるが，それは大曼荼羅・三昧耶曼荼羅・法曼荼羅・羯磨曼荼羅の 4 種であり，順に仏の尊像，仏具や印契，種子や真言，そして仏の活動する姿を現した曼荼羅をいう．

不空訳の「3 巻本教王経」は，この九会曼荼羅の中央，成身会曼荼羅の部分に当たる．すなわちこれは，『初会金剛頂経』「金剛界品」の最初に描かれる「金剛界大曼荼羅」に相当し，37 尊で構成される．この 37 尊とは，中央の輪に毘盧遮那・大日と 4 波羅蜜を，四方の 4 つの輪に四仏の一尊ずつと 16 大菩薩の四尊ずつを，また四輪の間に内の 4 供養妃と外側の方形の四隅に外の四供養妃を，その四方の中央に 4 摂を資する，総計 37 尊を指す（越智 2005：186）．ここで，中央に位置する大日如来を四方の 4 つの輪から取り囲む「四仏」とは，中央から東南西北の順に阿閦（金剛部），宝生（宝部），無量寿（蓮華部・法部），不空成就（羯磨部）の四仏である．これら五仏各々の内証が「五智」であり，大日如来が法界体性智（菴摩羅識の密教的止揚），阿閦如来の大円鏡智（阿頼耶識の密教的止揚），宝生如来の平等性智（末那識の密教的止揚），無量寿如来の妙観察智（意識の密教的止揚），不空成就如来の成所作智（前五識＝眼耳鼻舌身識の密教的止揚）をそれぞれ司る．これを象徴的に表現した仏具が五智金剛杵ということになる（宮坂 2011：356）．

ここで本稿第 1 章に引いた『五秘密軌』を振り返ると，その中での「金剛界」とは「意」，「蓮華部」は「口」に相当し，宝部は自利，記されていない羯磨部は利他に相応するとされるため，順に「身」「意」「口」「自利（利他）」の順に記述されていることになる．これは金剛界曼荼羅の基準に沿ったものである．「宝部」は本来「自利」を説く部分であって，ここにこそ，密教が大乗顕教とは一線を画す一つの理由が見出されよう．密教は「自未度先度他」ではなく，自ら法楽を味わいつつ，衆生とともにその法楽に与かろうとする意向を示すものである．もっともその際の「宝」とは，現世利益とは意味の上で異なる．

6．第四品「一切義成就品」の構造

では次に，『初会金剛頂経』第四品「一切義成就品」について，遠藤祐純師の見解を基に（遠藤 2005b），内容の分類を試みたい．該当頁数は「大正大蔵経」に基づく．

1．大曼荼羅（尊像；37 尊）
　最勝曼荼羅王の三摩地
　　勧請【百八名讃】411 下
　　宝部の変現　　412 中
　阿闍梨の所作と入壇作法
　　図絵曼荼羅　412 下【中央輪　四方輪　八供　四摂】
　　入壇作法　　414 上
　悉地智　　414 上【智印　宝秘密印智】
　四種印智　415 上【大印智　三昧耶印智　法印智　羯磨印智】
2．三昧耶曼荼羅【秘密印曼荼羅】（仏具；37 尊）
　最勝曼荼羅王の三摩地　416 中
　阿闍梨の所作と入壇作法
　　図絵曼荼羅　416 中
　　入壇作法　　417 中
　悉地智　　417 中【宝三昧耶智　宝部三昧耶秘密印智】
　四種印智　418 中【大印縛　三昧耶印智　法印　羯磨印】
3．宝智曼荼羅【智法曼荼羅】（尊像＋三鈷杵；37 尊）
　最勝曼荼羅王の三摩地　419 上
　阿闍梨の所作と入壇作法
　　図絵曼荼羅　419 上
　　入壇作法　　419 中
　悉地智　　419 下【宝部法智　宝部秘密印智】
　四種印智　420 中【大印　三昧耶印　法印　羯磨印】
4．供養曼荼羅【事業・羯磨曼荼羅】（蓮華；37 尊）
　最勝曼荼羅王の三摩地　421 上
　阿闍梨の所作と入壇作法
　　図絵曼荼羅　421 上
　　入壇作法　　421 下
　悉地智　　422 上【宝羯磨智　秘密印羯磨智】
　四種印智　422 上【大印智　三昧耶印智　法印智　羯磨印】
5．四印曼荼羅（21 尊）
　最勝曼荼羅王の三摩地　422 中
　阿闍梨の所作と入壇作法

図絵曼荼羅　422 下
入壇作法　422 下
悉地智　422 下【智　秘密印】
四種印智　422 下
6．一印曼荼羅（17 尊）
最勝曼荼羅王の三摩地　422 下
阿闍梨の所作と入壇作法　422 下
悉地智　423 上
四種印智　423 上

ちなみに，最後の一印曼荼羅部・最勝曼荼羅王の三摩地の部分で示されるのが，先に本稿第 4 章の一覧表において示した「一切義成就大明」Oṃ vajra-maṇi-dhara sarvârtha-siddhiṃ me prayaccha ho bhagavan vajra-ratna hūṃ（オーム．金剛宝珠を持てる尊よ，我がために一切の富の成就を汝与えたまえ，オー，世尊金剛宝よ，フーム；八田 1985：150）であり，「義」は「富」の意である．

7．『十八会指帰』第四品末尾部をめぐって

さて『十八会指帰』初会の末尾部すなわち第四品に相当する部分には，次のような記述がある（大正№ 869，286 上）．那須政隆師によれば（那須 1975：23-24），次のように訓読される．

「次に一切義成就大品を説く．中には曼荼羅あり．第一は大曼荼羅なり．．．．第二に秘密三昧耶曼荼羅．．．．第三に法曼荼羅．．．．第四に羯磨曼荼羅．．．．第五に四印曼荼羅．．．．第六には一印曼荼羅なり．．．．皆是れ則ち，彼の婆伽梵執金剛，虚空蔵の変化なり．次に都（スベ）て説くこと前の如し．一一の曼荼羅中に秘密の助成方便を散誦す．次後に示すに釈迦牟尼佛の閻浮提に降じ，変化身をもって八相成道することなり．皆是れ普賢菩薩の幻化なり．一切如来は還って一百八名をもって金剛薩埵を讃揚す．かくの如きは第一会なり．次に第二会を説く．．．．」．

ここまで，『初会金剛頂経』は四大品より成ると記してきた．それは上に引いた『十八会指帰』の記述に拠る見解であり，『十八会指帰』を見る限り，第

四品である「一切義成就品」は全編の末尾にまで及ぶと考えられる．すなわち，上の一節から明らかなように，『十八会指帰』は別途「第五部（品）」の部立てをしているわけではない．けれども，第四品の後に続く部分に関して，『密教大辞典』は「第 19 一切義成就大曼荼羅広大儀軌分より第 22 分までは，（第四品である）一切義成就品，第 23 分以下は諸部の秘密教理分なり」としている．そして『仏書解説大辞典』は，この後者「諸部の秘密教理分」を「第五：一切如来眞實摂大教理分」とし，別途部立てを施している．『大蔵経解説大辞典』も，これを（第五）「諸部秘密教理分」と名づける（伊藤 1998：255）．もしそのように「第五部（品）」を立てるのであれば，その第五部（品）が『金剛頂経』のどの部分を指しているのかについて，答えは極めて明らかである．それは，『十八会指帰』によれば「次に都（スベ）て説くこと前の如し．一一の曼荼羅中に秘密の助成方便を散誦す」以下の部分であり，遠藤祐純師の区分によれば「後怛特羅」および「後々怛特羅」に含まれる部分である．

第四品の開始部に相当する第 19 分「一切義成就大曼荼羅広大儀軌」は，大正大蔵経の頁数では 411 下より始まり，続いて第 20 分「宝秘密印曼荼羅広大儀軌」は 416 中より，第 21 分「智曼荼羅広大儀軌」は 419 上より，第 22 分「羯磨曼荼羅広大儀軌」は 421 上より始まる（前章の表をも参照）．

この後，『仏書解説大辞典』の名称を引くならば，第 23 分「随応方便分」（422 中～）；第 24 分「秘密法用分」（429 下～）；第 25 分「最上秘密分」（433 中～）；第 26 分「一切儀軌勝上分」（436 中～）となる．前章の表に示した「四印曼荼羅」の開始部が，第 23 分の開始部と一致する．第 23 分から第 25 分にかけての 3 分の内容は，遠藤師の解説によれば，それぞれ 1「大曼荼羅に歓待される（部分）」，2「陀羅尼曼荼羅に歓待して説かれる（部分）」，3「法曼荼羅に歓待して説かれる（部分）」である．そして第 28 巻の途中より始まる第 26 分「一切儀軌勝上分」が第 30 巻末にまで及び，これが「後々怛特羅」に相当する．この部分については，次々章において検証する．

ここで改めて，本稿が立てている問題を明確化しておくことにしたい．「第四品」という明確な品立てをしていない施護訳はさておくとして，①「第四品」を「一切義成就品」としつつ「第五：秘密教理分」を立てない不空の理解と，②第 23 分「随応方便分」以下の部分が内容的に付録部であることを認識しこれを別立てにする昨今の大半の理解とは，はたして混淆すべきものなのであろうか．不空の訳語である「一切義成就品」を第四品の品題として採用するならば，「義」という語彙の内実をめぐる問題点が顕在化することが明らかになっ

た今，『初会金剛頂経』全体をめぐる解釈は，何がしかの刷新を必要としていると思われるのである．

8．慈雲著『教王経釈』より

さて慈雲は，彼晩年の作の一つであることが確実な『教王経釈』において，次のような注疏を展開している．以下『慈雲尊者全集』に従って引用してみよう．本稿では，上掲のような問題点に対峙するに際して，慈雲が何らかの解決策を提起してくれるものと考える．以下，慈雲は基本的に施護訳のテキストに基づいている．これを「」で，また慈雲の釈を＜＞で記すことにする．

「現證三昧大教王経にいはく，そのとき具徳大菩提心普賢大菩薩一切如来心に住し給ふとき」

＜経文．この上に序文あり．行者自性の毘盧遮那佛．常恒不変に光明心殿に住し給ひ，自性所成の眷属と共に自受法樂ならせ給ふをとけり．此のそのときと云ふより已下は経の正宗分なり．具徳とは梵文には薄伽梵と云ふ．萬徳をそなへ給ふ名なれば，今ここに具徳と翻ずるなり．大菩提心普賢大菩薩とは，智法身始成正覚のほとけなり．一切如来心とは，理法身本有円成のほとけなり．理智融会し始本不二なるときを住といふなり．三世の諸佛無上正覚を證得し給ふは，みな此のおもむきなりと云へり＞．

「一切如来この佛刹の中に示現し遍満し胡麻のごとくみな悉く雲集し給ふ」．

＜此の経の上の文に，此の人間世界より上，色究竟天まで諸佛充満し給ふと云へり．胡麻の如くとは，すき間なくみちみち給ふのたとへなり＞．

「一切義成就菩薩の菩提場に坐し給ふ所にいたり」

＜上のごとく諸の吉祥相を具足して悪魔みな退散せるとき，一切義成就菩薩，阿娑婆那伽三摩地に入給ふ．此のあさはなかは禅定の名なり．此の禅定の相は一切世界みな変化のごとく幻の如く陽焔の如く空谷の響のごとく旋火輪の如く乾闥婆城の如くにして，上に求むべき佛なく下に度すべき衆生なし．寂滅平等究竟眞實智相応するところなり．此の時諸佛みな此の一切義成就ぼさつのところにいたり給ふなり．三世諸佛の無上正覚を成じ給ふときは，ことごとく此の相ありと云へり．此の中普賢菩薩と云ひ，一切義成就ぼさつと云ふは，同体異名なり．別人にあらず．理趣釈経に云はく≪一切義成就とは普賢菩薩の異名なりと≫＞（以下略）．

以上，慈雲の『教王経釈』でまず注目すべきは，施護訳を基本としているにもかかわらず，慈雲はここで施護の「一切義成」を，不空訳における「一切義成就」に置き直しているという点である．慈雲は，不空が訳さず施護訳によるしかない部分については，この訳語に立ち入ることをしない．逆に言えば，慈雲による上掲のような「一切義成就＝普賢」という理念は，ただ不空訳の文脈においてのみ成立する，と言えるのかもしれない．

9．『初会金剛頂経』流通分について（その1）

ではもう一度『初会金剛頂経』に戻り，第四品「一切義成就品」の後（本稿ではこれを，不空訳における第四品の内包と判断するのであるが）に続く部分，特に全編の最後部に位置する「流通分」について考えてみたい．遠藤師によれば，『初会金剛頂経』は，

金剛界品　降三世品　遍調伏品　一切義成就品　後怛特羅　後々怛特羅
流通分

に大別される．さらに「流通分」の構成は，同じく遠藤師によれば下記のようになる．

1．勧請（百八名讃）
2．転法輪（い）釈迦如来転法輪　　（ろ）金剛界如来転法輪
　　（は）降三世如来転法輪　（に）法王如来転法輪
　　（ほ）一切如来転法輪
3．菩提樹下説法（イ）因由　（ロ）菩提樹下説法
4．勧請（百八名讃）

以下，この 2．転法輪　のくだりに関して，遠藤師の書き下し文を基に，適宜補筆を施しながら引用することにする．

「その時，世尊大毘盧遮那如来は，彼の一切如来の増上主宰である金剛手菩薩魔訶薩の勧請の語を聞き已って，即ち，一切如来に白して言さく，

唯だ願わくは，如来よ，所行を摂受されんことを．

【い）釈迦如来転法輪】

時に，一切如来は即ち復た雲集し，此の頌を説いて曰く，

一切有情を利せんが為めの故に，一切世界一切処において
所応の調伏衆相門の，此の大法輪を宜しきに随って転じたまえ

是の頌を説ける時，所有る一切の仏刹の一切世界に，普く一切方処に遍ずる一切有情が，悉く一切を微塵量の如き曼拏羅中に見るに，世尊釈迦牟尼如来は，各其の前に住し妙法輪を転じたり.

【ろ）金剛界如来転法輪】

その時，金剛手菩薩魔訶薩は，即ち，頌を説いて曰く，

一切有情を利せんが為めの故に，一切世界一切処において
所応の調伏衆相門の，大金剛輪を宜しきに随って転じたまえ

是の頌を説ける時，所有る一切の仏刹の一切世界に，普く一切方処に遍ずる一切有情が，悉く一切を微塵量の如き曼拏羅中に見るに，世尊金剛界如来は，各其の前に住し金剛界等の一切の金剛輪を転じたり.

【は）降三世如来転法輪】

その時，降三世菩薩魔訶薩は，此の頌を説いて曰く，

一切有情を利せんが為めの故に，一切世界の一切処において
所応の調伏衆相門の，大忿怒輪を宜しきに随って転じたまえ

是の頌を説ける時，所有る一切の仏刹の一切世界に，普く一切方処に遍ずる一切有情が，悉く一切を微塵量の如き曼拏羅中に見るに，世尊降三世如来は，各其の前に住し一切如来の大忿怒輪を転じたり.

【に）法王如来転法輪】

その時，聖観自在菩薩魔訶薩は，此の頌を説いて曰く，

一切有情を利せんが為めの故に，一切世界の一切処において
所応の調伏衆相門の，大忿怒輪を宜しきに随って転じたまえ

是の頌を説ける時，所有る一切の仏刹の一切世界に，普く一切方処に遍ずる一切有情が，悉く一切を微塵量の如き曼拏羅中に見るに，世尊法王如来は，各其の前に住し，蓮華輪を転ず.

【ほ）一切如来転法輪】

その時，聖虚空蔵菩薩魔訶薩は，此の頌を説いて曰く，

一切有情を利せんが為めの故に，一切世界の一切処において
所応の調伏衆相門の，大妙法輪を宜しきに随って転じたまえ

是の頌を説ける時，一切の仏刹中に住せる一切有情が，若しは細，若しは大の一切方面に皆な悉く彼の一切如来を見るに，須弥山頂の金剛摩尼宝峯大楼閣

中に在り．一切如来は獅子座上に処し，金剛界等一切法輪を転ず」.

以上より明らかなとおり，い）において釈迦牟尼如来の転法輪が説かれるのに続き，ろ）では金剛界品の主宰である金剛界如来の転法輪，は）では降三世品の主宰である降三世如来の転法輪，に）では遍調伏品の主宰である観自在菩薩の転法輪，そしてほ）では（いわゆる）一切義成就品の主宰・虚空蔵菩薩の転法輪が順次説かれる．ここにおいて『初会金剛頂経』の四大品が，釈迦如来の転法輪のもと，各品の主尊それぞれの転法輪の成就というかたちで総括されるのである．これは，釈迦如来による大日如来との合一であるとともに，四部であったものが密教的な止揚を経て五部と化し，身・意・口・自利・利他各々の分を与えられ，相互の交わりをも伴って密的な成就が果たされることを意味していよう．

このことに関して，遠藤師は次のように述べる（遠藤 2005c：491-492）．「本経が説かれる契機となった一切義成就菩薩が，成道し，仏身を円満され金剛界如来即ち毘盧遮那と等同になられた．その刹那，反転して，自内証界を衆生教化に向けて開くため色究竟天より須弥山頂の楼閣に降臨され，釈迦牟尼如来の三摩地に住された．この段は，それらと重層して考えられるべきである．毘盧遮那の命により集会せる一切如来たちは，頌をもって，次のように述べる．≪一切衆生を利益するため，一切世界の一切処において，一切の衆生を教化・調伏するため，法輪を転じたまえ≫と．釈尊成道後，梵天勧請を含めて，教化へと転ずる様相である．密教発生の淵源を釈尊においた一例であろう」.

かくして，この『初会金剛頂経』は，その末尾部・流通分においてようやく，(本来の)「一切義成就菩薩」の成道身である釈迦如来の登場を見ることになる．遠藤師によれば「ここに至って，釈尊の菩提樹下成道は，初期仏教の成道に重ねて，毘盧遮那身の成道相であることを示す」とされる（遠藤 2005c：1）．再説するならば，『初会金剛頂経』冒頭部において，一切義成就菩薩は色究竟天にて五相成身観を修し，毘盧遮那と等同身を得る．次いで須弥山頂に降臨し，四輪即ち四智を転じ四如来を出生し，自内証界を相互供養の曼荼羅として現じ自眷属等一切に化他の相を示す．けれども，密器に相応しい衆生ではあるが須弥山頂には登り得ない者に対して法を示すため，釈迦牟尼如来の三摩地に入り，菩提樹下に成道の相を示すわけである（遠藤 2005c：1）．

10.『初会金剛頂経』流通分について（その２）

では次に，上記の 3. 菩提樹下説法　より，その（ロ)「菩提樹下説法」の部分を，やはり遠藤師の書き下し文から引用しよう.

「その時，世尊は，正覚を現成し，其の未だ久しからざる間に，一切如来の身語心金剛を以て，一切如来身に於て自ら開覚し已り，須弥山頂より菩提場に詣る．到り已って即ち菩提樹下に於て世間に随順して其の化事を転ず．吉祥草を執り此の頌を説いて曰く，

大なる哉　最上の自利已る　広く有情を利するは一切の教なり
所応の調伏は勤勇の因　彼は邪外の非見者
世間の所有る不調伏　一切の暗冥　諸悪見を破す
智光清浄にして大利円　此の中　如応に成仏を得る

是の頌を説ける時，欲界の諸天は，世尊の此の真実語を了せず．即ち，是の言を作す.

今，此の沙門は，何故に，乃ち能く菩提を求めんが為是の難事を作し，疲労を悍伏し諸苦を忍受するや.

その時，世尊は即ち是の処に草を敷き坐し已り，彼の天に告げて言く，

汝天聖者よ，我が所行に依り宜しきに応じて，我れに大菩提果を施せ.

時に，欲界の諸天は，亦た復た仏の所説を解すること能わず．即ち，時に倶に帝釈天王の所に詣り，到り已って，天主の前に於て，具さに上事を陳ぶ．是の時，帝釈天王は，即ち欲界の諸天主衆と共に色界の天主大梵天王の所に詣り，復た，上事の相と言議を陳ぶ.

時に，大梵天王は，欲界と色界の諸の天主衆幷びに一切の三界増上主宰大自在天と共に斯の事を議る．是の時，大自在天は，即ち，普尽き三界増上主宰の那羅延天等一切の天主に告げて言く，

汝，天聖者よ，当に知るべし，如来応供正等正覚は，世間に随順し其の化事を転ず．現に阿耨多羅三藐三菩提果を成ず．人趣及び天趣を摂すと謂う勿れ．是の故に，当に知るべし，復た天に生ずと雖も天中の所成は畢竟成仏の果を証すること能わず．彼の善所行に，我等宜しきに応じ同に往き供養せん.

時に，大自在天等諸天主衆は，尋ねて，即ち，共に大菩提場に詣り，世尊如来の坐せる処に到り已りて，世尊の足を頭面礼し，御前に仏に白して申さく，

世尊よ，仏教勅の如く我等は行に依る．唯願わくは，世尊よ，悲愍摂受したまえ．復た，世尊よ，草地より起ち，我が献ずる所の微妙勝座を受け，其の座上に於て阿耨多羅三藐三菩提の果を証成されんことを請い奉る．

その時，世尊は，諸天主に告げて言く，

汝，天聖者よ，我が所行に依って，即ち，当に我れ阿耨多羅三藐三菩提果を施すべし．

諸天主は，仏に白して言さく，

世尊よ，我れは仏菩提を施すに能うる所に非ず．若し，我れに其の力有らば，能く我等，豈に自ら仏菩提果を証せざらんや．

その時，世尊は，是の如き義を了知せしめんが為めの故に，即ち，頌を説いて曰く，

当に知るべし　色に非ず　無色に非ず　実に非ず　虚に非ず　亦た浄に非ず此れ　仏菩提の大智門なり　実に開覚し已れば成佛を得ん

彼の諸の天主等は　須臾の間黙然として住せり．是の時，世尊は，草座より起ち，復た，諸天主に告げて言く，

諸天の聖者よ，汝，能く此の仏智を開暁すること能ふや不や．

諸天主等は，仏に白して言さく，

世尊よ，我等，仏智を開暁すること能わず．

その時，世尊は，勝座に処り，復た頌を説いて曰く，

浄意は如応に開覚する所　大菩提心を堅固に生ぜよ
如理に仏身を観想し　金剛薩埵を堅固に作せ

時に，諸天主等は，俱に仏に白して言さく，

仏の教勅の如く我れ是の如く行ず．

言い已りて，即ち，時に，悉く仏会を離れたり」（遠藤 2005c：497-500）．

末尾に近い一節「浄意は如応に開覚する所... 金剛薩埵を堅固に作せ」の部分は，『初会金剛頂経』金剛界品冒頭部に既出の「心通達をもって　菩提心を堅固になせ　金剛薩埵において堅固に作し　仏を自身なりと修せ」，すなわち「五相成身観」の部分と同文異訳である（遠藤 2005c：505）．そして，上に全容を示した一節は，通常 1）降兜率（釈尊が兜率天からこの世に降りて来る） 2）托胎（摩耶夫人の胎内に宿る） 3）出胎（誕生） 4）出家（修行のため王宮から脱出する） 5）降魔（菩提樹下で修行を妨げる悪魔を打破する） 6）成道（悟りを開き，仏陀となる） 7）転法輪（弟子たちに説法す

る）8）入滅（沙羅双樹の下で涅槃に入る）の8段階で成り立っているとされる「八相成道」のすべてではないものの，6）7）についての十全な記述となっている．

したがって，全体としてこの一節は，先に引いた『十八会指帰』の「次後に示すに釈迦牟尼佛の閻浮提に降じ，変化身をもって八相成道することなり」という記述と，正確に対応していると言えるだろう．ということは，それに続く「次に都て説くこと前の如し．一一の曼荼羅中に秘密の助成方便を散誦す」が，「後怛特羅」および「後々怛特羅」に相当することを再証する．すると不空は，後に施護が「一切義成就」と訳し，時に釈尊の菩薩時代の名と混同されかねないようなかたちで出した虚空蔵尊の名を，敢えて出すことをせず，『初会金剛頂経』の第四品の品題のみを「一切義成就品」としつつ，この「一切義成就」が，初会末尾部に再度登場する釈迦如来を指すものと解されるように『十八会指帰』を編んだとは考えられないだろうか．さらに，もし不空が『十八会指帰』を自ら撰したと言えるならば，この（いわゆる）「秘密教理分」と呼ばれる長大な部分の扱い方に関しても，不空はこれを極めて簡素化していることになり，ここに不空のすぐれたバランス感覚を垣間見ることができるのではないだろうか．初会第一品に一度だけではあるが登場する「一切益成就」という訳語選択により，不空が，たとえ原語が一致していても，釈尊を表す場合でなければ「一切義成就」という訳語を用いないということが明らかとなった．不空にとって「一切義成就」とは「皆是れ普賢菩薩の幻化なり」と解すべきものなのであった．

11. 慈雲『理趣経講義』における「一切義成就」理解をめぐって

さて，ここで不空から慈雲に目を転ずることにしよう．先に引用したように慈雲は，『30巻教王経』に基づき，そのうち「一切義成就菩薩の菩提場に坐し給ふ所にいたり」という一節に注を付す際に「普賢菩薩と云ひ，一切義成就ぼさつと云ふは，同体異名なり．別人にあらず．理趣釈経に云はく≪一切義成就とは普賢菩薩の異名なりと≫」と記していた．一方彼は，1803年2月24日成稿の『理趣経講義　一』において，やはり「一切義成就とは普賢菩薩の異名なり」という『理趣釈』の本文を引きつつ『十八会指帰』を参観し，『理趣経』を釈している．

「(一切義成就者) 釈迦如来の三つの名の一なり．三名とは，Sarvârtha-siddha, Śākya-muni, Devātideva．指帰十八会の中，初会，≪次に後に釈迦牟尼仏と示現し，閻浮提に降りて変化身にして八相成道す．皆これ菩薩の幻化なり≫と」.

かくして慈雲は，『理趣経講義』においても『教王経釈』にあっても，『理趣釈』で語られる≪一切義成就とは普賢菩薩の異名なり≫を墨守し，そこから離れることがない．彼の『教王経釈』は施護訳に基づくものであったが，この「一切義成就菩薩」が関わる箇所に関しては，慈雲は施護訳の「一切義成菩薩」を引くことをせず，不空訳の「一切義成就菩薩」を用いていた．すると慈雲に随う限り，『五秘密軌』『理趣釈』『十八会指帰』がすべて不空訳であることに照らしても，『十八会指帰』に見られる「第四品：一切義成就品」における「一切義成就」とは，普賢＝釈尊を意味しているものと取るべきであろう．

12. 釈尊の成道

ではここで，釈尊の成道の次第を顧みてみよう．

釈尊は 29 歳にして，妃であるヤショーダラー姫との間に儲けた愛息ラーフラの出生祝賀の宴の夜，従者チャンナ一人を連れ，愛馬カンダカにまたがって城を抜け出し，出家したとされる（以下，色井 1968：9；高崎 1983：25 以下）．釈尊は山に入ると沙門の姿を取り，愛馬とともにチャンナを父スッドーダナ（浄飯王）の許に返し，出家の意志を示す．父は 5 人の家臣を釈尊の許に遣わし，彼ら 5 人も沙門となり釈尊と行動を共にして，彼らはウルヴェーラーの村（「苦行林」）を拠点に断食に励んだ．その期間は 6 年と伝えられる．しかししばらくの後，釈尊は苦行の無益さを感じて断食を放棄する．釈尊は，村の傍らにあるネーランジャラー河（尼連禅河）で水浴びをした後，近くの村の娘の差し出す乳粥を受け取り，体力を回復する．5 人の仲間は，これを目にして「ゴータマは堕落した」と判断し，その許を去るが，釈尊はひとり，ガヤーの菩提樹の下に吉祥草を敷いて座り，禅定に入った．この期間は 21 日間と伝えられる．この間の内心の抗争が，悪魔たちによる様々な形での誘惑として伝えられるが，釈尊は群がり起こる煩悩迷妄を次々に降伏し，終に 12 月 8 日の夜明け，最高の悟りに到達し「仏陀」となった．この境地は「阿耨多羅三藐三菩提」，漢訳で無上正等覚と訳されるが，この間の経緯が「成道」すなわち釈尊の覚りを開くまでの過程である．

仏陀となった釈尊は，この内心の平安を，しばしの躊躇の後，他者にも伝えるべきであると判断し，まずは先に自らの許を去った5人の旧友に伝えるべく，彼らのいるバーラーナシーに急いだ．伝説ではこの伝道の決意は梵天の勧めに帰せられている（梵天勧請）．バーラーナシーに赴いた釈尊は，郊外の鹿野苑（サールナート）に彼らを見出すと，自らが如来であることを彼らに告げる．5人は釈尊の威厳に満ちた態度に打たれ，次の言葉を待ったとされる．釈尊は覚りの内容を「四諦」の説にまとめ，覚りに向かう実践として「八正道」を示し，これが苦楽を離れた「中道」であると宣言した（高崎 1983：31）．5人は心服し，進んで釈尊の弟子となったが，この間の経緯が「初転法輪」である．後に瑜伽行派は，非有非無の一切唯識における「中道」，すなわち唯識中道を説くが，これは釈尊によるこの「初転法輪」の主題が「中道」にあった，という認識に基づくものでもある．

結．ふたたび『法華陀羅尼略解』へ

筑波大学附属図書館に所蔵される『法華陀羅尼略解』は，第一陀羅尼「薬王菩薩陀羅尼」および第六陀羅尼「普賢菩薩陀羅尼」に対する注疏部分にしか，実質的な内容は含まれていないと言える．その第一陀羅尼注疏部から慈雲の「八正道」理解を，また第六陀羅尼注疏部から彼の「唯識」理解を読み取ることができるのではないか，というのが拙著での主旨であった（秋山 2018）．

いまこのうち「唯識」を「唯識中道」と理解するならば，これらの内容，すなわち「八正道」および「唯識中道」は，釈尊の成道後の初転法輪における説法の内容，と理解することができるのではないだろうか．すると『法華陀羅尼』とは，その解釈に当たっての基盤・前提として，密教的成道の体験を不可欠とする一節であると言えよう．『法華陀羅尼』は，顕教に属す経典であることを超え，すでに密教の経典の一部を構成しているのである．

慈雲は上述したように，1803年2月24日校了の『理趣経講義』において，「一切義成就とは普賢菩薩の異名なり」という『理趣釈』の本文，すなわち不空の理解を引くことで，『初会金剛項経』全編を，釈尊の密教的成道の記述として受容することに対し，積極的に讃意を示している．慈雲はこうして釈尊の成道体験を追体験しつつ，その10日後の1803年3月4日，『法華陀羅尼』の注疏を終えた．『法華陀羅尼略解』とは，八正道から唯識中道にかけての仏道をめぐり，慈雲が注疏の形で展開した「転法輪」なのであった．

注

1　本稿は 2018 年 5 月 13 日，東京神田の学士会館において筆者が行った，慈雲尊者奉賛会主催による第 5 回慈雲尊者生誕 300 年記念講演「晩年の慈雲尊者：律から密へ」の内容の一部を，論文の体裁に改めたものである．

参考文献

秋山　学 2018b『律から密へ　―晩年の慈雲尊者―』春風社.
秋山　学 2018a「両部典礼論」『古典古代学』第 10 号，67-108.
伊藤堯貫（解説）1998「0865 金剛頂一切如来真実摂大乗現證大教王経」鎌田／河村ほか編『大蔵経全解説大事典』雄山閣.
遠藤祐純 2006b『続金剛頂経入門 1 初会金剛頂経：金剛界品』ノンブル社.
遠藤祐純 2006a『金剛頂経入門　初会金剛頂経：金剛界品　金剛界大曼荼羅〈三巻本〉』ノンブル社.
遠藤祐純 2005c『続金剛頂経入門 4 初会金剛頂経：後怛特羅・後々怛特羅・流通分』ノンブル社.
遠藤祐純 2005b『続金剛頂経入門 3 初会金剛頂経：遍調伏品・一切義成就品』ノンブル社.
遠藤祐純 2005a『続金剛頂経入門 2 初会金剛頂経：降三世品』ノンブル社.
遠藤祐純 2001『智山教化資料第 13 集　金剛頂経入門（続編）』真言宗智山派宗務庁.
遠藤祐純 1985『智山教化資料第 13 集　金剛頂経入門（上・下）』真言宗智山派宗務庁.
越智淳仁 2005『図説マンダラの基礎知識』大法輪閣.
上村勝彦（訳）1984『カウティリヤ　実利論』（上・下）岩波文庫.
小峰彌彦 2016『曼荼羅入門』角川ソフィア文庫.
小峰弥彦ほか 2013『縮刷版　曼荼羅図典』大法輪閣.
色井秀譲 1968『天台真盛宗読本』百華苑.
高崎直道 1983『仏教入門』東京大学出版会.
塚本賢暁 1920『国訳密教：経軌　第 5』国訳密教刊行会.
中村元・三枝充悳 2009『バウッダ【佛教】』講談社学術文庫.
中村元ほか 1989『岩波　仏教辞典　第二版』岩波書店.
那須政隆（訳）1975『続国訳秘密儀軌』第 2 巻.
那須政隆（訳）1932『定本国訳秘密儀軌』第 21 巻.
八田幸雄 1985『真言事典』平河出版社.
平岡昇修 2005『初心者のためのサンスクリット辞典』世界聖典刊行協会.
福田亮成 1981『智山教化資料第 9 集　國訳　般若理趣経純秘鈔』真言宗智山派宗務庁.
堀内寛仁 1983『初会金剛頂経の研究　梵文校訂篇（上）』密教文化研究所.
堀内寛仁 1974『初会金剛頂経の研究　梵文校訂篇（下）』密教文化研究所.
松長有慶 2006『理趣経講讃』大法輪閣.
松長有慶 1989『密教　インドから日本への伝承』中公文庫.
密教学会 1931『密教大辞典』法蔵館.
宮坂宥勝（訳注）2011『密教経典　大日経・理趣経・大日経疏・理趣釈』講談社学

術文庫.
頼富本宏 2005『『金剛頂経』入門　即身成仏への道』大法輪閣.